酷なことを言わないで

西田拓真

パンダよ、シロクロはっきりさせろ
真っ白になればシロクマ
黒くなればヒグマかツキノワグマ
これじゃパンダでなくなっちゃう

ポチ、お手
元々足しかないので手が出せない
前足を勝手に手だと思わないで

太っている人を見てブタみたい
ブタはこの体型が標準なの
レディーに向かって失礼ね
キリンに向かって首が長いのねと
言っているのに等しいわ

あの人猫を被っている
猫は覆面の道具ではない
被るというならこの首を切り
骨と肉を剥ぎ取るのか
なんと恐ろしい人間ってやつは

君死ぬべきじゃなかった

西田拓真

十二年前の春
その知らせはまるで電報のような文言だった
突然のことに何を思いどうしたか
その辺の記憶はあやふやだ
ただ疑念だけが強く残っていた
なぜ君は自ら命を絶ったのか

高校卒業以来正直どうでもいいやつ
オレには関係ないと言い聞かせていた
だが心の整理がつくのに何年もかかった
君と写った写真を破り捨てた
こんな不吉なものと
でも本当は認めたくなかった
この世に君がいないことを

月日は流れ日々の忙しさで
思い出すことなどなかった
そんなある日何の前ぶれもなく
君は急にオレの目の前に現れた
夢でない現実のこの世界で
オレの心は揺れに揺れ
立っていられない程の地響きに

錯覚だと気づくのに暫く時間を要した
君によく似た人だったんだと

君が亡くなるずっと前
クラスメイトとして初めて言葉を交わした時から
いい友達になれればと願った
今となっては儚い夢物語
生きていてくれさえすれば

その後君はどのような道を歩みたかったのか
それは誰にも分からない
何も記さず勝手に消えてしまったのだから
ただ君という自伝はこれで終わった
そのことだけはたしかだ